

葛飾北斎の神奈川冲浪裏に関する論考

2023年1月31日 長塚四史郎

今年葛飾北斎(1760~1849)の神奈川冲浪裏が話題になる年ですが、物理学者戸田盛和氏(「ソリトン、カオス、フラクタル」岩波書店 1999)によると、この絵は波の三つの著しい特徴がよく表されていると言います。

- ① ソリトン: 波のエネルギーが狭い範囲に局在する安定な集団運動(大波の前にある小山のような塊)、(カッコは加筆)
- ② カオス: 波の不安定で不規則な、(先の予測困難な)運動、(カッコは加筆)
- ③ フラクタル: くだけ、さらに細かく(自己相似的に)くだける運動、(カッコは加筆)

この不思議な絵は、物理学者を驚嘆させたようで、ソリトンの国際会議でポスター化されてたびたび用いられてきたと言います。

上記ソリトン、カオス、フラクタルは20世紀後半に発見され理論化されたものです。戸田先生はソリトンの理論家でもあります。いずれも非線形現象で、線形理論では扱えない現象です。まだ近代以前の江戸の絵師がどうしてこのような絵を描くことができたのか。

以前、NHK が特集番組を放映していましたが、横浜の柴漁港の漁師にこの絵を見せると、東京湾ではたまにこのような現象を見ることがある、ということでした。そこでNHK は、船舶模型用の大型水槽で、専門家に波を起こす実験をしてもらったところ、確かに似たような波を再現しました。

私の想像ですが、このような話を北斎は聞いていて、何度も船に乗って神奈川沖に出て、実際に遭遇したのだと思います。そして彼は恐らくアスペルガーでしたから、瞬間的に記憶し、波の本質はこの3種類からなるととらえ、印象的な構図にまとめたのだと思います。もともと自然は非線形ですから、真摯に向き合えば裏切らない、といことです。ダーウィンはガラパゴスの小さな自然にコツコツと向き合っってそこから考えたから壮大な進化論を帰納したのでしょう。

時計仕掛けの生物観で有名だったデカルトは晩年スウェーデンのクリスティナ女王に招かれ移住し、女王に自説を進講した折、それでは機械は子供を産みますか、自分を見たことはありません、と言われ、間もなく死んだと戸田氏の本の最後のほうに書

かれてあったのでびっくりしました。自然に真摯に向き合わなかったことを気付かされたためでしょうか。

概念大国フランスの哲学者ミッシェル・セールの本に「生成—概念を超える試み」があり、ずっと前から私の本棚の隅にあります。まだ読んだことがありません。しかし何となく言わんとすることは分かります。過剰な既成概念や先入観が人を誤らせる、生成してくる概念こそ真なのだ、ということです。

中国も概念大国なので、概念優先で事実は概念に従っているようです。日本人がそうになっていないのは、自然を貴び、かな文字があり、漢字の使用を限定してきたからでしょうか。

寺山修司氏の「書を捨てよ、町へ出よう」は読んだことはありませんが、概念を捨て、現実がいかにあるか、から考えよう、というようにも読めます。17世紀の科学革命の一側面は、時計仕掛けの世界観(線形思考であるとともに近接作用論でもある)を打破することだったと思われます。ニュートンの「私は仮説をつくらない」という宣言は、なぜ？ではなく、いかに？に答えるのが科学だという宣言でしょう。

古今和歌集に始まる日本詩歌史上の諸革命も、原点である“自然に真摯に向き合う”ことへの回帰だったと思いますが、江戸末期の北斎や若冲の出現は、この流れの中にあるのでしょうか。

この精神のベクトルの起源は、言うまでもなく縄文時代にあります。これが今日まで文化遺伝子として受け継がれてきたので、モノづくり大国となったわけですが、それが新たな情報革命、デジタル革命の荒波の中で思想的弱点にもなっているので、令和の革命としてアングロ的荒々しさを学習することが求められている、といったところでしょうか？

